

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：21201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530727

研究課題名(和文) 熟練介護職員のキャリア形成からみた認知症ケアに関する研究

研究課題名(英文) A study on dementia care from the perspective of the career development of skillful care workers

研究代表者

鈴木 聖子 (SUZUKI, Seiko)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40305272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：認知症高齢者に質の高いケアを提供している熟練介護職員は、今までどのような方法で経験を蓄積してきたのかということ明らかにした研究である。研究方法は、熟練にいたるまでのキャリア、認知症ケアの認識、態度について質問し調査により明らかにした。さらに熟練介護職員が行う認知症ケアの実際についてヒアリングを行い、その特徴を分析した。それらの結果から認知症ケアに携わる介護職員がより実践に即したキャリア開発を行うための提案をした。

研究成果の概要(英文)：The present study focused on the accumulation of experience on the part of skillful care workers providing high quality care for elderly people with dementia. A questionnaire survey was conducted to investigate the workers' career characteristics as they acquired their skill, as well as their knowledge of dementia care, and attitude. An interview survey on the actual dementia care provided by the workers was also carried out, and its characteristics analyzed. Based on the combined results, the study proposed an approach enabling workers involved in dementia care to achieve more effective career development.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：熟練介護職員 認知症ケア キャリア開発

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者の増加に伴い、認知症ケアへの社会的ニーズの高まりは介護職にとって質の高い認知症の専門的なケアが求められるようになってきた。筆者はこれまで特別養護老人ホーム介護職員の職場適応に関する継続研究を通して、職場の環境条件が異なるユニット型と従来型介護職員の適応の相違点をさまざまな視点から明らかにし報告してきた。

たとえば、ユニット型の初任介護職員は、経験の多い介護職員に比較して、利用者との関わりにおけるストレスが有意に高いことや、利用者居室のケアに有する滞在時間は、ユニット型の場合、経験の多い職員のほうが有意に長いことなどについて報告してきた。

このような介護職員に関する研究やケアの質についての分析、考察等多くは介護職員の経験年数に基づいて進められていることが多い。しかし、介護職員に関する研究を継続する中で経験年数を軸とする分析には限界があることや、ケアの本質的な研究の重要性を確認し「ケアの実践過程」をテーマに初任介護職員を対象とする研究を行ってきた。

その知見は、認知症ケアについての養成校での教育、あるいは特別養護老人ホーム、認知症グループホーム等での教育を行うための提案に結びつけることができた。今後、さらに「認知症高齢者のケアの特性」「介護職員のキャリア形成」の2つの課題を認識し本研究にとりくむことにした。

上記の2つの課題認識について、1つは、質の高い認知症高齢者ケアを実践できる成熟した層(熟練介護職員とする)の実践過程を具体的に記述することで、認知症高齢者への介護実践の方略として用いられている技術の全体像を把握することを意図する。

具体的には「認知症高齢者が生活環境に適応する」過程を通して、熟練介護職員はどのような実践の技術をどのような介護場面において用いているのかという介護実践過程を記述することにより「認知症高齢者のケアの特性」についての基礎資料を得ることができるのではないかと考えた。

課題の2つ目は、介護職員のキャリア形成についてである。認知症高齢者に質の高いケアを実践している熟練介護職員とは、どのような人なのか、この問いかけについてはこれまで殆ど研究の蓄積は見られない。

看護職については、経験を積むことはケアの質をあげるためには必要不可欠であるが、経験年数とは必ずしも一致しない、経験をどのように積むかが重要であるという知見が報告されているが、それは介護職員にとっても例外ではないと考えられる。今回、熟練介護職員は、どのように経験を積んできた人なのかという視点に基づき本研究を実施する。

上記の課題を明らかにすることで、さらに実践に即した教育を行うための基礎資料を得ることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、筆者のこれまでの研究成果の発展を意図する認知症ケアに関する継続研究である。認知症高齢者の生活環境への適応過程における熟練介護職員のケアの全体像を把握し、より実践に即した教育を行うための基礎資料を得ることを目的とする。具体的には次の2点を目的とする。1 熟練介護職員が生活環境への適応困難が顕著である時期の認知症高齢者と関係を形成しながら介護を実践していく過程を明らかにする。2 熟練介護職員のキャリア形成過程、認知症ケアへの認識、態度について明らかにする。

用語の定義

1 キャリア形成：介護福祉士という公的資格を前提に一定の配置ルートのもとに経験と能力開発を繰り返しながら継続的、体系的な有為な優れた介護福祉士の育成、活用に努めていくこと。

2 熟練介護職員：介護職員としての経験年数3年以上とし、職場の責任者が「良いケアを実践している」と考える介護職員。

3. 研究の方法

本研究目的達成のために3年間の継続研究とした。認知症の人が生活環境の変化に伴う適応困難な入所時期を経て施設の生活に適応していく過程について

1) ケアの実践過程における熟練介護職員のキャリア形成過程、認知症ケアへの認識等を中心に質問紙調査を行い、熟練介護職員について量的な側面から分析する。

調査対象は、WAM-NETで登録された全国の特別養護老人ホーム300カ所を無作為に抽出し責任者に、次に示す3名の推薦を依頼した。「質の高い介護を実践していると評価した経験年数3年以上の介護職員」計900名である。調査期間は、平成23年5月とし、調査内容は、基本属性、キャリア形成項目(仕事の満足度、仕事継続意向、ケアについての認識、ケア実践における印象的な内容、参加研修、最も影響を受けた人、自己啓発)

倫理的配慮として、調査の依頼に際して書面にて調査の主旨、協力は自由意思であること、匿名性の保持、得られたデータは本研究の目的以外には流用しないことを明示した。質問紙の返送により研究への承諾とした。

2) 認知症の人と関係を形成しながら介護を実践していく過程を明らかにするために熟練介護職員を対象に個別面接調査を行い、関係の形成過程を質的に分析する。

研究方法は、特別養護老人ホームの責任者が質の高い介護を実践していると評価した経験年数3年以上の介護職員に協力を依頼した。調査は文書に基づく口頭の説明にて施設長の許可を得、施設長が推薦した介護職員に依頼した。協力者である介護職員には、文書に基づく口頭で説明を行い承諾を得た。

調査期間は、平成24年6月から8月である。質問内容をあらかじめ設定するが、お互

いのやりとりの中ですすめていく半構造化面接とし、面接時間は、1時間程度とした。

協力者は、3施設各1名計3名である。1 A氏 40歳女性、経験年数20年、介護福祉士、介護副主任、面接時間は60分だった。2 B氏 29歳男性、経験年数9年、介護福祉士、ユニットリーダー、面接時間は65分だった。C氏 26歳女性、経験年数6年、介護福祉士、面接時間は50分だった。

面接内容は、ここ1年くらいの実践の中で1「これこそが介護職のケアであると感じた体験」で、しかも2「良いケア結果をもたらすことができたと思う体験」について1例以上を自己の体験から選び、その援助過程を自由に話してもらった。

面接内容は逐語録とした。

4. 研究成果

1) の研究成果

有効回答数は277名(回収率30.7%)であり、その内訳は従来型196名(70.8%)、ユニット型81名(29.2%)だった。性別は、女性185名(66.8%)、男性92名(33.2%)であり年齢は、30歳代が最も多く110名(39.7%)だった。これまでの就業職場数は、1カ所が154名(55.6%)と最も多く、次いで2カ所67名(24.2%)だった。認知症ケアの平均従事機関は、14.2年(SD1.3年)で殆どは正規職員であったが8名(2.9%)は非正規職員だった。また、186名(67.1%)は中間管理職であった。所有資格数は、2資格が100名(36.1%)と最も多く1資格が99名(35.7%)であった。資格の内訳は249名(89.9%)は介護福祉士の資格を所有しており、殆どがヘルパー2級との重複所有であった。また社会福祉主事65名(23.5%)、介護支援専門員56名(20.2%)の資格所有者も多かった。

キャリア形成において、最も大きな影響を受けたと思う人については、上司が97名(35.0%)、先輩69名(24.9%)、同僚35名(12.6%)、研修会講師34名(12.3%)の順でありユニット型、従来型ともに殆どその違いは見られなかった。また、最も影響を受けたと思う研修の時期については就職後1~5年が115名(41.5%)と多くを占め6~10年が73名(26.4%)であり、およそ半数は1年から5年以内に最も影響を受けていることがわかる。また、職場内研修では、平均3.1年(SD2.4年)で最も影響を受けており、職場外研修では2.6年(SD1.8年)と職場外研修の方が早い時期に影響を受けていた。なお、ユニット型と従来型の違いは殆ど見られなかった。

ケア内容における評価では、まあまあ十分である水準の評定3.0以上の項目をあげると12項目中4項目あり、その内容は利用者との直接的な関わりにおける状態や状況に対応する方法論的な内容であり、(たとえば、利用者の聞こえの状況にあわせて声の大きさ・高さ等に気をつけて話している等)アセスメント等の判断をとまなう項目について

は低い傾向であった(表1)。

表1 熟練介護職員の認知症ケアの各評価項目平均値

項目	平均値	標準偏差
1 自立の観点から利用者にとって優先すべきことを判断し支援している	2.67	0.63
2 支援を行う際には利用者の意向を確認し、納得を得ている	2.86	0.61
3 利用者の行動の原因を理解し、意思を尊重した上で介護を行っている	2.84	0.61
4 利用者の言葉や行動の背景を理解している	2.87	0.61
5 利用者の聞こえの状況に合わせて声の大きさ・高さ等に気をつけて話している	3.32	0.62
6 利用者の表情に注意し、うなづいたり肩や手に触れるなどして話を聞いている	3.31	0.63
7 入所前の利用者の生活状況を家族から聞き取り、介護計画に反映している	2.61	0.76
8 利用者のできることをアセスメントし、可能な限り自立した生活を支援している	2.58	0.68
9 認知機能低下のため介護者の言葉が利用者に伝わらないことがあることを理解し自分の感情をコントロールしている	3.02	0.64
10 認知症高齢者の行動についてその原因を考え、利用者を理解し支援している	2.86	0.58
11 認知症高齢者のプライドを傷つけるような言葉や態度を示さない	3.07	0.61
12 徘徊による事故やケガなどをおこさないよう利用者にあった具体的な安全対策をとっている	2.94	0.62

次に仕事に対する満足度は、ユニット型のほうが従来型よりも満足を感じている割合がやや高かった。仕事継続意向については従来型138名(70.4%)、ユニット型51名(63.0%)が続けたいと回答しており従来型の方が続けたい割合が高かった。

これまでに受けた研修については、施設外は体系的研修、テーマ別研修、ニーズをふまえたトピック的な研修に分類された。体系的研修はリーダー研修、中堅職員研修、指導者研修(管理者)の人数が多かった。テーマ別研修は、認知症介護実践者研修、ユニットリーダー研修参加者が多く、ニーズをふまえたトピック的な研修は、認知症ケア関連が最も多く、次いでリスクマネジメントであった。施設内研修については、体系的研修とニーズをふまえたトピック的な研修に分類されたが、体系的研修は新任職員研修が4名、リーダーシップ研修2名、3年目研修と中級研修が各1名であり、多くがその時のニーズをふまえたトピック的な研修だった。大きな影響を受けた研修としては回答数の多い順に認知症ケアが40名、認知症介護実践者研修30名、ユニットリーダー研修12名の順であり多くが認知症ケアに関連する研修からの影響を受けていた。

以上の結果より、熟練介護職員のおよそ90%は介護福祉士の資格を有し、年代は30歳代が多いことから熟練介護職員と経験年数介護福祉士資格所有者との関連は大きいといえる。また、就業後1~5年程度の研修で最も大きな影響を受けた研修を受講しており、1年~5年後の体系的な研修受講の重要性をうかがうことができる。研修内容は、認知症ケアに関する内容が最も多く、認知症介護実践者研修やユニットリーダー研修への参加者が多くを占めていた。また、大きな影響

を受けた研修についても認知症ケアに関連する内容が多く、その理由として研修の大系性や時間数、認知症高齢者ケアへの還元等が考えられる。上司や先輩からの影響は、キャリア形成において大きく関与していると考えられ、職場内における意図的な機会教育や日常の職場内教育の必要性が示唆される。しかし職場内における個別的、体系的な過程をふまえた研修のプログラムが求められる。

2) の研究成果

ヒアリングを逐語録とし、分析は語られた経験を意味のまとまりごとに断片化し、その内容を端的に表現するような見出しをつけた。見出しは次の6カテゴリに表現することができた。1 共に(行動、そばにいる、昔を想起する)、2 創り出す(居場所、居心地の良い時間、安心感)、3 予測する(行動を)、4 受け止める(思い)、5 あらわず(介護者のうれしさ(プラスの感情)、存在野価値、タッチ、傾聴)、6 移す(居場所、他の職員に、感情コントロール)であった(表2)。

表2 熟練介護職員のケア

カテゴリ	内容
共に	行動
	より添う(側にいる)
	昔を想起する
創り出す	居場所
	居心地の良い時間
	安心感
予測する	行動を
受け止める	思い
あらず	介護者の嬉しさ(プラスの感情)
	存在の価値
	タッチ
	傾聴
移す	居場所
	他の職員に(介護を)
	感情をコントロール(調整・移す)

また、具体的なケア内容として、長い時間をかけてその人に最も適切と思えるケアを創っていくことが必要でありその根底には介護の専門性があり、具体的には、無条件の受容、思いやる感性、知識、技術をあげていた。

例えば、ケアの方法としては、1つ1つのケア場面でさまざまなケアの内容を試すことを挙げていた。その際には、まず感覚に働きかけることを通してその反応から利用者のニーズに気づくことの重要性をあげていた。また、利用者との向き合い方についてはツールを介した関係と直接的・対面的関係の2つの方法を挙げていた。ツールを介した関係は視覚の(文字言語)優位性や利用者との距離化・相対化重視の関係づくりであり、直接的・対面的関係は利用者との共通感覚(間身体感覚)、直面的・個別的関係づくりと捉えることができ、両者の関係づくりを総合的に

用いての関係づくりを行っていた。

また、ともにいるという関係づくりでは何度でも顔を見せる、可能な限り多くの回数を、声をかける何度でも声をかけるというように、ともにいるという関係づくりについては、顔を見ること、声をかけることの2点を挙げていたが、そこには可能な限り多くの時間と多くの回数を必要条件としてあげていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1 鈴木聖子：介護福祉学の構築にむけて-ケア論からの考察-、介護福祉学、18(2)、167-172、2011

2 鈴木聖子：認知症ケアにおける利用者の生活世界へのアプローチ(論壇)、日本認知症ケア学会誌、11(3)、642-647、2012年

3 鈴木聖子：特別養護老人ホーム初任介護職員の認知症ケアの困難内容の構造化、日本生活支援学会誌、第2巻、14-22、2013年

4 鈴木聖子：介護の専門性についての学術研究、介護福祉 2013 春季号 N089、財団法人社会福祉振興・試験センター、49-59、2013年

5 鈴木聖子：認知症ケアにおける必読書・文献「介護過程」認知症ケア事例ジャーナル、6(2)、日本認知症ケア学会、199-201、2013年 [学会発表](計1件)

鈴木聖子：熟練介護職員のキャリア形成に関する研究、第20回日本介護福祉学会大会、165、京都、2012年9月

[図書](計3件)

1 石井享子監修 鈴木聖子著：MINERVA 福祉資格テキスト、介護福祉士こころとからだのしくみ編、科目10 認知症の理解、ミネルヴァ書房、71-122、2012年

2 初任者研修テキストブック編 鈴木聖子著：MINERVA 福祉資格テキスト、第11章睡眠に関連したこころとからだのしくみと自立に向けた介護、ミネルヴァ書房、417-426、2013年

3 大田貞司監修、諏訪徹、本名靖、鈴木聖子他編著：地域ケアを拓く介護福祉学シリーズ生活支援総論、光生館、97-110、2014年

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木聖子(SUZUKI Seiko)

岩手県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40305272